第 17 回日本在宅医学会もりおか大会　**一般・指定演題**

（研究報告）抄録用紙

演題名 （全角 80 字以内）	良好な職場環境構築の考察 ～訪問看護ステーションの勤務実態調査から～
演者名	穂積始美　平間祥子　駒板美佐恵　小齋清美
所属	有限会社ケイ　南桜訪問看護ステーション

研究方法 （右から番号を選び NO.欄に番号をご記入ください）	1.症例報告　2.症例シリーズ報告　3.コホート研究 4.症例対照研究　5.調査研究　6.介入研究　7.二次研究 8.質的研究　9.その他研究	NO. 5

目的：

訪問看護に従事する者のライフワークバランスの中では、子育て・一時的離職・個別の家庭環境などにより、それぞれが望む看護業務への関わり方が変化してくる。一方、訪問看護にあっては求職者数が少ないと言われて久しい。少数の人員で業務を進めていくなかでは職員個人の許容できる業務範囲に制限がかかりやすく、職員同士で相互にサポートしながら日常の業務を行っている。そこで、複数の訪問看護事業所にアンケートを行い業務実態を調査し、より働きやすい環境の構築に必要とされる要素について考察する。

方法：

宮城県内の訪問看護ステーション（78 カ所）に調査用紙を送付し、選択あるいは自由記載形式にて回答を得た。また、当ステーションの看護職員１１名にも職務に関して調査を行った。なお、いずれの調査も無記名回答とし、研究発表に用いることについて通知している。

結果：

訪問看護ステーションにおける勤務状況として、人員不足や求職者不足にある結果が得られた。また、子育てと看護業務の両立の困難さや、職員の平均年齢が４０歳代以上に集中していることなどが判った。また、休暇や報酬面での満足度が低い傾向にあった。

考察：

訪問看護は十分な技術と経験を持たなければ務まらないという固定観念があった。しかし、小規模事業所であるからこそ各々の役割分担と相互補助が可能であり、それが現行の訪問看護業務を維持していると考えられる。子育て世代や復職するベテラン世代が良好な業務環境を実現していくために、実状から導き出される工夫を現場で実践していくと共に、制度面にも反映していくためのアプローチが必要と考えられる。